

## 里山と若者

及川ひろみ

NPO法人 宍塚の自然と歴史の会  
理事長

はじめに

「NPO法人「宍塚の自然と歴史の会」では、数年来、筑波大学等の実習を受け入れている。今年は7月5日、宍塚で筑波大学生物資源学類1年生の実習が行われた。田んぼの草取り等の屋外実習のまえに行われた室内学習では、「里山の保全を考える時、手を入れる入れないはどのように考えたらいいですか」といった質問が次々と出され、学生の積極的な姿勢に、筑波大学の先生方もたいへん満足な様子であった。

里山の保全活動に取り組む当会としても、



筑波大生の真剣な姿を見て、実に頼もしく思った次第である。当会では、この他、筑波大学大学院環境科学研究科の実習も受け入れている。そうしたことから、筑波大学の関係者の間で、当会の活動についてもっと詳しく知りたいとの声も聞かれるので、以下、当会について紙数が許す範囲で簡単に紹介してみたい。

### 宍塚の里山

土浦駅とつくばセンターを結ぶ幹線道路—土浦学園線—沿いに、こんもりと茂った林が続く一帯がある。林を分断するように陸橋の下には常磐自動車道が通っている辺りで、ここ土浦市宍塚には、約100haの里山があり、その里山の中央に宍塚大池がある。水源は周囲の林からのわき水（地下水）、雨水だ。複雑に入り組んだ池の岸は、護岸工事がされていないため、水辺から林まで、自然の岸辺が維持されている。コナラ

林、スギ植林、マツ林など多様な二次林や植林地が70haの面積を占め、これに、谷津田、湿原、畑、放棄田、草原などの景観要素が加えられ、面積に比しても極めて多様な環境によって構成されている。東京から筑波山の麓まで地図を張り合わせて作った土地利用図を見ると、最も広い緑の塊である。宍塚大池周辺は国指定史跡上高津貝塚、宍塚古墳群など遺跡が点在し、国の重要文化財の梵鐘を有する般若寺があり、近世のたたずまいを残す家並みや石造物など豊富な歴史遺産を併せ持つ貴重な地域で、遺跡、文化財の宝庫である。



### 会の発足と活動

1979年、私は夫の仕事の関係で川崎市から当時の桜村に転居した。茨城らしい自然を求めて出会ったのが宍塚大池だった。そこにはかつて当たり前、しかし当時東京・神奈川など都市化された場所では見ることのできなくなった生き物、特に多くの昆虫に出会い感動したものだ。子ども達と楽し

む場所となっていた。1987年宍塚全域の開発計画が新聞に掲載された。そのころ宍塚を知っている人はわずかで、知られることなく住宅地などに変わると考えた時、なんともったいない、拳句の果てに、昔はいいところだったなどと言うせりふは聞きたくないと強く思った。

大池周辺の林が私有地であり、地権者の多くが開発を望んでいることも次第に分かった。そんな中でまず多くの人に宍塚を知ってもらいたい、そして、地権者たちにとって開発以外の選択肢はないのだろうかと言う途方もない願いを持った。

1989年会が発足してからは地元との対話を深める工夫、多くの子ども達が自然を体験する場所となるようさまざまな活動を行ってきた。それと同時に、宍塚を訪れた多くの人が「いいところだ」と語られるが、いいところとはどんなことかを実証するためにさまざまな調査活動、記録の収集を行った結果、チョウやトンボが全国に生息する種の1/4を確認することができた。

現在 NPO 法人宍塚の自然と歴史の会では大きく分けると以下のような事柄に取り組んでいる。

①里山の暮らし、農業、文化歴史を調べ、広める活動

会発足当初から、大池で出会う地元の方々から、かつての宍塚の様子を聞き取る

ことを続けていた。その後歴史部会立ち上げによって組織的に聞き書き活動が行われるようになり「聞き書き里山の暮らし—土浦市宍塚」(茨城県中学校推薦図書)「続聞き書き里山の暮らし—土浦市宍塚」を出版した。里山は歴史的な文化財と言えるが、地元の人々の肉声が及ばないと望ましい保全はないと考えている。

書籍では主に、人々の暮らしが大きく変わった昭和35年ころより前の様子をまとめた。これは当時の暮らし知恵、技術、歴史の中で培われてきた文化の多くを、高度経済成長の過程で、便利になった暮らしと引き換えに失ってしまった事実を、思い知ることの連続であった。技術のみならず、人々の心の襞にひそむアイデンティティーをも失う時代であったと感じている。幸い宍塚



地域の方々は今も人のつながりが心地よくあり、真に豊かな暮らしに接し、救われる思いである。

宍塚のような里山はかつてどこにでもあった。この活動を始めた頃「宍塚がどこにでもあるつまらないところ」と認識していた人々も、聞き書きの作業を通して、宍塚を「自慢できる宝」と捉えるようになってきている。

## ②里山の自然について調べ、保全方法を探る活動

幸い学園都市の研究所、大学などの研究者から、自然環境調査について学ぶ機会に恵まれたこともあるが、科学者ばかりが実に多様な方々から教を乞うて植物、昆虫、野鳥などは勿論のこと、様々な調査を行った。1995年、研究者の執筆も仰ぎ「宍塚地域自然環境調査報告書」(地形、土壌、水質、藻類、維管束植物、トンボ、チョウ、クモ、両生・爬虫類、鳥、サシバ行動圏、キツネ、景観等々21項目)を出版した。

会発足当初、身近な自然についてその重要性が語られることはあまりなかった。しかし当時すでに多くの生き物が急激に姿を消していた。そこで身近な自然を考える全国的なシンポジウムを3年連続して行った。即ちオニバスサミット、里山サミット、サシバサミットだ。このサミット開催の結果、都市近郊の里山が全国的に壊滅状態に

あることが明らかになり、1995年茨城県に宍塚地域を自然公園にするよう要望書を提出した。昨年は「里山にあるため池の保全を考える」（ため池シンポ）を開催した。現在、植生調査、生物相調査、キノコ調査、水質調査等を継続している。

### ③里山を保全、再生する活動

かつてくまなく利用されていた里山だが、放置によって、山は荒れ、道すら失われつつあった。発足後まもなく池のほり80アールの林、散策路の草刈を山主、区長の許可を得て開始した。現在は以下のような活動に行っている。

- ・ 林の植生管理
- ・ 竹林の整備
- ・ 水路、ビオトープ池の整備
- ・ 米オーナー制の実施：里山保全の根幹に農業の継続がある。谷津田の耕作を続けることを目的に、市民が出資し米を買い取る手法。オーナー開始後、谷津田の復田が進み、田んぼの面積が3倍以上に広がった。
- ・ 休耕田の草刈
- ・ 休耕田、放棄畑を畑に復元、
- ・ 池の保全作業：野生のハスの刈り取り、ブラックバス等外来生物の駆除
- ・ 散策路の草刈と整備
- ・ 絶滅危惧植物である「オニバス」の保全  
里山の利用目的がかつてとは全く異なる

現在、100ヘクタールの里山すべてをかつての姿にすることを目的に活動しているわけではない。活動を通してこれからの里山保全のあり方を構築する、新しい里山像を作り出してゆくそのための助走と考えている。地元にとっても納得の行く保全、保全してよかったの声になることを目指している。今、環境省の委託事業、ため池の外来魚駆除による水質改善事業が始まっている。

### ④子どもたち、若者、市民へ、里山の価値を知らせる活動 —— 環境教育活動

自然とのかかわりが希薄になっている、子ども、若者にとって里山は自然の不思議、を身近に知ることのできる格好の場所である。そればかりか、危険を回避する能力を身に着ける、即ち自分の身は自分で守ることを学ぶ場と捉えている。会発足当初から「宍塚のお知らせ」を配り、子ども達の参加を促してきた。現在つくば・土浦の小学生に1回1万6千枚のお知らせを年11回配布している。観察会（昆虫、キノコ、ヘビなど自然、古墳、遺跡めぐりなど歴史をテーマとした月例観察会）、子どもの目線で自然を楽しむ「里山子ども探偵団」、小・中・高生を対象とした観察会など、年間80回以上実施している。

また「里山体験」をテーマとした活動も盛んだ。自然を見る眼を養うほか、地元の方々の知恵、技を広め伝える活動だ。縷々

ない、脱穀、竹細工、石臼による粉ひき、篠竹を使った工作等々レパートリーも豊富だ。この活動に参加する親子のほとんどが初体験と言える状態だ。「カラスウリ」を知っている親は半数にも満たない。彼らの多くは自然の素晴らしさ、不思議さに接することなく、バーチャルな世界で育っている。里山体験が活動の大きなテーマになりつつある。

幸い穴塚は最近、年齢を問わず実に多くの人が集まる場所になってきている。

(おいかわ ひろみ)